



# う 羽 化 か

2000年8月  
第21号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 宗 助 悦 子



## 葡萄の棚が つづく

### 目 次

漢点字変換ソフト「EIBRK」について (5) (木下 和久) . . .	i
漢点字公認活動の報告 その2 (野島 静) . . . . .	1
川上泰一先生に出会って (3) (東野トシエ) . . . . .	2
日本と中国の漢字使用状況の比較研究 (前編) (村田 忠禧) . . . . .	6
点字の読みづらさと漢点字の触読について (8) (岡田 健嗣) . . . . .	9
漢点字訳書のご紹介 . . . . .	14
第2回講習会終了報告 . . . . .	15
五ヶ月間を振り返って (岸田 晴美) . . . . .	17
初心者の感想 (馬場 威力) . . . . .	18
連載「点字から識字までの距離」(18) (山内 薫) . . . . .	19
イラスト版「漢点字ってどんな字？」(20) . . . . .	21

## 漢点字公認運動の報告 その2

盲教育に漢点字の導入をすすめる全国協議会

代表 野島 静

本誌四月号において、文部大臣等への陳情の準備は整っているというところまで報告いたしました。

四月の二八日になって、文部大臣等への面談の日は五月一〇日（水曜）と決定しました。

いよいよ当日の朝を迎えました。東京の空はずがすがしい五月晴れの一日でした。

午前一一時頃には、その日の集会場として借りていた四谷三丁目の「全日本鍼灸マツサージ師会館」に「盲教育に漢点字の導入をすすめる全国協議会」の発起人の一〇名が勢揃いしました。

そこで、陳情するに当たってどのような点を強調するかについてお互いの意思確認と、役割分担について話し合いました。私はこのような会合をこの運動を立ち上げる前に行っておくべきであったと大いに反省させられました。

交渉の段取りは私が日ごろ親しくしていたいでいる鳥取県選出の衆議院議員石破茂先生にお願いしてい

たので、先ず、衆議院会館に先生を訪ね、先生の案内で文部省へ行き、午後二時半より交渉に入りました。

文部大臣との面談は僅か七、八分でしたが、その後、文部総括政務次官の河村建夫先生、次いで、特殊教育課長の池原先生、教科調査官の鈴木先生と約一時間にわたって、「視覚障害児も漢点字を用いて教育していく必要があること」について参加者全員が熱っぽく訴えました。その反応を一口でまとめれば『打てど鐘は響かず』といった空しさが残りました。

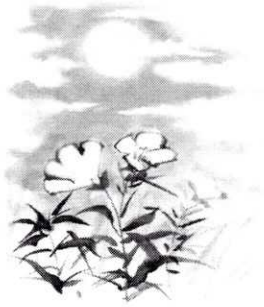
即ち、大臣や政務次官は、「何らかの形で関係者の話しを聞く会を持つことを考えてみましょう」とおっしゃっていただきましたが、現場の実情をよくご存じの担当官の先生方は、もっぱら、盲学校においても漢字は十分指導してある。例えば、「校庭は（こうは、がっこうのこう、ていはにわ）」というように、また、漢字には、偏や旁、冠や脚等によって構成されていることを図版を示して教えてもいる。これ以上視覚障害児の負担を重くすることには問題がある。等々で「検討してみよう」という声は一言もありませんでした。明くる一日には、日本点字委員会の会長である朝博<sup>ひろし</sup>先生、日を改めて五月二二日（月）には全国盲学校校長会長の皆川春雄先生のところへ陳情に参りました。

結果は、「四万人の署名の意味は重く受けとめ、必ず関係者に伝える」とおっしゃっていただきましたが、ここでも、盲学校の現状は重複障害児がその大半を占め、養護学校化している。難しい漢点字を指導できるような状況にはないことを理解していただきたいというようなお話でした。

私は第一回は、最初からこのような結論になるだろうと予想していましたので、かえって、新たな戦術や目標を見付けた気がしております。

これからも息長く、関係団体はもとより、文部省等へも繰り返し粘り強く訴えて行きたいと考えております。

これからも皆様の一層の御支援、御指導をお願いし御報告とさせていただきます。



## 川上泰一先生に出会って (第三回)

東大阪市 東野 トシ卫

### 漢点字の誕生 (承前)

名古屋の方が漢点字を両面書きできる点字板を作成して下さいました。私は友人に修理していただき今も重宝しています。ところが、金型を無くされてしまわれたとかで、今日ではこの点字板は入手不可能だそうです。とても残念に思います。仲村点字器製作所から従来の点字板を使用して、漢点字が書ける片面書きの点字板が販売されています。これも重宝しています。漢点字が書ける懐中定規やタイプライターや点字プリンターなど数種類販売されています。私は漢点字を両面書きできる点字板の販売を願っています。数行書き足すには、点字板に勝る道具はないと思っております。漢点字の普及発展のためにもぜひ製作して下さいますよう切望致します。

私は点字プリントされたものを送って下さると、この点字はどのプリンターを使用されているのかなあなどと思いつながら読ませていただいています。外国製の大きな点字でインターポイント印刷にもずいぶん慣れ

ましたが、やはり日本点字が好きでインターライン印刷が好きです。

「先生は物理が専門だから漢点字を創案できた。漢字一字をバラバラに分解して、それを部首選択統合しできた。国語が専門だと思っっている人が多いけど、物理が専門だから部首選択統合ができる。字形を守りつつ省略する。これは大変な作業です」とおっしゃり、「(峠)という字は山と上下と書くが峠は山の上にあることが多いから下は省略して(やう)にしたんや、古いは(れろ)やろ、木が古くなると枯れる(きろ)や、草が古くなると苦い(くろ)や、漢点字の一連性はここにもちゃんと保たれている」とこのように部首選択統合のことや一連性文字の妙味をよくおっしゃっておられました。

「日本人は手先が器用です。ですから8点の触読は可能です。6点も8点も同じです。8点を使用することで漢点字は完成できました」と始点終点の発想を御自慢なさっておられました。

川上先生御自身が創案して下さった漢点字を生徒に使わせてその様子をごらんになり、研究実験を積み重ねられた結果漢点字は誕生しました。

## テキストの『欧州紀行』を読み

漢点字の学習用テキストは『漢点字解説』といいますが、川上先生が作成して下さったものです。前編は85回あり、後編は27回だったと思います。1回に新しい漢点字が20余りあり、読み方やその字の持つ意味や字式や熟語や関係する文字などが説明されており、その後『欧州紀行』が連載されていました。そして最後に書き取りがありました。

『欧州紀行』というのは、川上先生がヨーロッパを御旅行されたときの思い出をユーモアたっぷりの文体で新しい漢点字を使って書いて下さっていた旅行記です。この『欧州紀行』に引き込まれて漢点字を学習された方は大勢いらっしやることと思います。

「この『欧州紀行』が書けたから、『漢点字解説』は作成できた」とおっしゃり、リツイ奥様のお知恵を拝借されたようにもおっしゃっておられました。

通信教育で漢点字を学習された方は、書き取りの答案を川上先生の所に郵送されたことと思います。

私は小学生高学年のころに、担任の先生から「同校の高等部の川上先生が、君たちも読み書きできる漢字の点字を創案して下さっています。完成したらぜひ習いなさい」と教えていただきました。

\* \* \* \* \*

亡き父からも「トシエたちには点字があるけれど、どうしても点字では耳学問になる。耳学問では限界がある。教えていただけるようになったら習ったらええな」と言われていました。このときは点字が耳学問というのがよく分かりませんでした。今はなるほどと思うようになりました。

私は中学生になり、文集を作成するために作品を募集していました。そうすると点字なのに読めない文字に出会いました。大ショックでした。その作品の作者に尋ねると、「仮名点字に訳してしまうと僕の書いた意味がなくなる」と言われ、漢点字のことを教えて下さいました。それで、私も早速川上先生にお願いして門下生に加えていただきました。

私が漢点字を習いはじめたときはもう漢点字はほぼ完成し、『漢点字解説』を作成しておられました。その『漢点字解説』の中に光栄にも漢点字を学習しているひとりとして名を連ねていただきました。

私は友人とふたりで漢点字を習いました。挫折しそうになったこともありますが、川上先生の懇切丁寧な御指導と友人のおかげでテキストを修了することができました。感謝です。

お昼休みや放課後を利用して、書き取りの答案を持ってふたりで、川上先生がおられる点字印刷室に『欧

州紀行』を読みに行きました。1週間に1回というペースで習いました。テキストを修了するのに2・3年掛かりました。2週に1回とか3週に1回などと例外週を設けると漢点字の学習は挫折します。極力さけるようにしました。

能力の秀れた方々に漢点字を教えておられたのですが、私たちの学習中から数人のグループで学習するとよいとおっしゃるようになられました。

そうして、私たちのことを「根性がある」と言ってもらいました。

「根性というのは、(1)自分の力を知り、それに合った計画を立てること。(2)その立てた計画に向かって成し遂げることです。この2点が大事です。多少の臨機応変は必要ですが、例外週が多くなると挫折です。漢点字の作成の部首選択統合も例外はあるけど、なるべく最初から例外は作らないようにしています。例外は最後の手段です。最初に例外を作ると例外だらけになってしまい、一連性文字は保持できません」と教えて下さいました。

私の人生にとってとても素晴らしいことを教えていただきました。(根性)という言葉を『大辞林』で調べると、「苦しさに耐えて成し遂げようとする強い精神力。」とあります。川上先生は(1)を重視されて

おられました。力を知り先を見通して計画を立てることの大切さを教えて下さいました。「漢点字のテキストも1週間に2冊でも2週間に1冊でもそれはいいのです。力以上の計画を立てると挫折です」とおっしゃいました。だから、私は何かをするとき、自分自身に適性があるかどうかを考えます。そうして分量からみて少し余裕をもって、計画を立てるようにしています。例えば、本の校正ならできそうだ、この分量なら1ヶ月ほどとか、この模様のセーターなら編めそうだ、よし！あそこへ行くまでに完成させてそのとき着て行こうと、まず、できる可能性があるかどうかを考えて、それから、計画を立ててするようにしています。多少は臨機応変にしていますが、できるだけ立てた計画を成し遂げるように努力しています。そうしないと怠けものの私は何もできずに時間ばかり過ぎてしまいます。また、ソフトのモニターにならせていただいています。特にキー操作のことですが、なるべく最初から例外は作らず、遠回りになっても他との関連を保つように作成していただいています。例外を作ると一見便利なようですが、それは後で混乱を招く結果になります。「先生、これ何ですか?」「あつ！それは邦文タイプライターや、余り触ると手汚すぞ」と慌ててこちらを向かれました。私が掌を上に向けますと、「東野も

う真つ黒や、こつちへ来て石鹸で洗いなさい。指先が特に汚れているぞ」と笑いながらおっしゃいました。そうして、「これは諸君には使えませんが、そのうちコンピュータが学校や図書館に導入されます。それで諸君が漢点字を入力するとテレビのような画面に漢字が映ります。もちろん晴眼者が漢字で入力したものを、そのまま漢点字に書き出してその場で読めるようになります。ですから、今からしっかりと漢点字を覚えておきなさい」と川上先生が誇らしげにおっしゃいました。「うわー!! そんなことができるようになるのですか?」私たち生徒は漢点字の学習に意欲が湧き希望が膨らみました。

放課後はクラブがあり行けないので、お昼休みに行こうと思うのですが、冬はパンを焼いていると時間が過ぎてしまいます。そこでテキストとパンを持って川上先生の所に行きました。「先生パン焼かせて下さい」。「はい、よっしゃかしなさい」とおっしゃいました。

私たちは『欧州紀行』を読みます。パンが焼けるいい匂いがしてくると、川上先生はストーブの所へ行かれパンをひっくりかえし焼いて下さいます。『欧州紀行』を読み終わると「はいパン焼けたぞ」とおっしゃり手の上に乗せて下さるので、こめかみの運動に徹し、川上先生の話は右から左に抜けていきました。

次は、横浜国立大学教授、村田忠禧先生がご発表になられた論文のご挨拶の部分です。現在の漢字文化圏の漢字の使用状況の分析と、文字としての漢字の本質、並びに漢字使用の実際のご研究、とりわけコンピュータによる処理と漢字の国際化へのご提言をおまとめになりました。二回に分けて掲載させていただきます。

先生は、漢点字を深くご理解下さり、本会も当初からたいへんお世話になっております。皆さまご存知のとおり、学習研究社版の『漢字源』の漢点字版の製作も、先生のお力添えでできました。

現在先生は中国にご滞在です。この論文の閲読をご希望の方は、活字版と電子版がございます。詳細は以下のアドレスにお尋ね下さい。先生のお手元にとどきます。

**murata@edhs.ynu.ac.jp**

## 日本と中国の漢字使用状況の比較研究（前編）

村田 忠禧（横浜国立大学）

これは平成九年度～十一年度科学研究費補助金（基盤研究（B）②）研究成果報告書『国際的情報交換の視点にたった東アジアの漢字文化の個性と共通性についての研究』（研究代表者 村田 忠禧 二〇〇〇年三月三十一日発行）に発表した報告論文です。

### 一 はじめに

アヘン戦争でのイギリス軍艦の砲声は中国の清朝の封建体制のみならず、東アジア全体を震撼させた。以来、日本でも中国でも、アルファベットという表音文字を使用する西洋文明からの全面的な進撃を受けるとともに、一刻も早く受動的局面から脱却しようと願う知識人の間から、東アジアの文明が停滞した原因の一端が漢字にあり、近代化実現のためには漢字を廃止し、表音文字を採用すべしと主張する動きが起った。漢字を近代化実現のためのマイナス要因と見なす傾向は、かなり長期にわたって人々の脳裏を支配してきており、

コンピュータが登場した際にも、漢字はコンピュータ時代に生き残れないものと否定的に評価された。インターネットが登場した時もそうであった。ただ幸いなことに人々はさまざまな英知を出してこれらの難関を突破し、東アジアの地において、漢字はその使命を終えるのではなく、むしろ新たな文明を創造するための重要な役割を担う可能性があることを事実でもって立証している。

しかし東アジアの漢字文化圏は、政治や社会の歴史そのものが十九世紀中葉から、分裂そして対立へと歩んでしまい、近代化を共同して行なおうとする機運は育たなかった。そのような険悪な関係が一段落した二十世紀中葉以降の新しい平和的な環境下でそれぞれの国の再建を進めてゆく過程においても、漢字の改革を共同して行なおうとする発想は生まれなかった。朝鮮半島においては、日本の植民地統治からの解放だけでなく、漢字そのものの束縛から脱却しようと、民族独自の文字であるハングルを全面的に使用する方向に進んでいった。日本においては、当用漢字（その後の常用漢字）を制定することで使用する漢字の数を制限するとともに、それらの漢字について字形を簡略化するという部分的改良がなされた。中国においては、漢字文化は政治の影響を直接的に受け、大きく二つに分裂

してしまった。中国共産党は中国大陆全土において革命を成功させると、大量に存在する農民の文盲を一掃するため、文字改革に積極的に取り組み、異体字を排除し、漢字を整理統合するとともに、筆画数を大幅に減らす大胆な漢字表記の簡略化を推し進めた（簡体字の制定）。一方、台湾島に逃げのびた国民党政権は、自己の統治の正統性を主張すべく旧来からの漢字文化を死守する姿勢を示したため、中国において簡体字と繁体字という二つの中国語の表記体系が生まれた。中国語の世界ですらこのように対立しているのだから、ましてや言語を異にする日本語や朝鮮語を含めた東アジア全体で漢字文化のあり方を考えることなど、ほぼ夢物語のような時代がかなり続いてきた。

多くの人からいずれば消滅するものと予測されていた漢字は実際には消滅しなかったし、今後もその傾向に進むようには思えない。今、東アジアでそれぞれ独自の道を歩んできた漢字文化に新たな動きが始まっている。政治の世界での対立はかつてほど激しくなく、国境や政治体制の違いの枠を乗り越え、経済活動が地球規模で活発化している。とりわけ中国が改革・開放政策を全面的に採用するようになった二十世紀の末には、来るべき二十一世紀には東アジアが活力あふれる地域としてこれまで以上に重要な役割を占めるとして

世界から注目されるようになっていく。経済活動の急激な発展は物資の流通だけでなく、必然的に人や情報の往来を加速化させている。当然、文字の世界にもその影響が現われる。これまでそれぞれの言語の内部問題として考えられてきた漢字の問題が、決して各言語

独自では完結しない問題を抱えていることが明らかになってきた。それはコンピュータが漢字を扱えるようになったこと、それぞれの言語にもとづくコンピュータのオペレーションシステムが使用でき、普及したことで、とりわけインターネットの爆発的な発展で、それぞれの言語で表現された情報を居ながらにして、瞬時に、誰もが受信し、発信できる時代になったことで、漢字とコンピュータとの関係をどのように解決するのかという新しい課題が登場してきた。コンピュータの世界ではその問題を解決する一つの方法として、ユニコードが制定された。ユニコード Unicode (ISO10646 / JIS X 0221) — 国際符号化文字集合はそれぞれの言語が独自に作ってきた情報交換用漢字コード体系を一つにまとめることを目指したが、既存の各情報交換用漢字コード体系に出現する漢字すべてにコード番号を割り振ることが不可能であるとして、字形が共通であるか否かを主要な判定基準として取捨選択して定めたコード体系である。しかし基礎になっているそれぞれの

情報交換用漢字コード体系そのものが抱えている問題にはまったく手を付けていないため、本質的な問題解決にはならない。

筆者の考えでは日本のこれまでの漢字をめぐる論の多くには重大な欠陥があると考えられる。それは大きく言つて次のような点である。(1) 漢字を日本語や中国語というそれを使用している各言語固有の文字であるかのように誤解していることである。アルファベットが決して英語を表記するためだけの文字ではなく、さまざまな言語を表記するために用いられているのと同様に、漢字もさまざまな言語で使用されるし、現に使用されている。しかし人々は漢字の具体的な表現形態である字体の違いにまどわされて、漢字と言語との結びつきをあまりに強固に考えすぎている。そのため、日本での漢字論議はあくまでも「国語」の世界から抜け出していないし、中国においても中国語(漢語)の世界しか念頭にない。(2) 図形文字(このような表現が妥当かどうかはとりあえず脇において)である漢字を、あたかも印鑑と同じような図形として見る傾向が強くなり、文字としての漢字の機能に着目する視点が乏しいこと。(3) 漢字は使われる時代や地域において、それぞれ一定の体系を有しているのであって、時代や地域の違いを無視してそれらを混在させることは正し

い用法とはいえない。それは歴史的仮名遣いと現代仮名遣いを混在させて用いるのが正しくないのと同様である。しかし日本では旧字体と新字体の混用が著しく、また異体字を整理統合し、漢字の規範化を図ることが十分に行なわれていない。あたかも歴史的に存在したことがあるあらゆる漢字を同一次元で表現できることが漢字問題を解決する鍵であるかのように論ずる向きもある。地球上に存在したことがあるあらゆる漢字を表現できるようにすることは意義のないことではないが、それは問題の解決にはならない。漢字の実際の使用状況から出発しない議論である。

あらゆる問題を考えるうえでそうだが、何事も実際の状況を正確に把握することから出発すべきで、その意味でまず日本語や中国語で漢字がどのような使われ方をしているのかを正確に掌握し、そのうえでコンピュータ時代における漢字文化のあり方を考える必要がある。そのような視点にたつて、以下に日本語、中国語のさまざまな分野における漢字の使用状況を明らかにし、問題点の所在を明らかにする。具体的にはパーソナルコンピュータで扱える日本語と中国語での漢字の使用状況を、政治、教育、新聞、人名・地名の分野で調査し、それぞれの特徴を明らかにすることから出発する。

## 点字の読み(ひらき)と漢点字の触読について(八)

代表 岡田 健嗣

### 四 音節符号としての点字(承前)

#### 英語の点字と略字(付記)

前回、英語の点字を例に挙げて、音節と点字符号との相関関係をみました。英語では発音が意味に直結していて、その表記はその発音を指示する文字(letter)であるアルファベットで行われます。点字でも、アルファベットの点字符号が用いられます。アルファベットの点字符号は、ルイ・ブライユの点字表の順序に従って定められました。しかし前回ご紹介したように、二六文字のアルファベットだけでなく、音節を一つのまとまりとした点字の符号、「略字」(contraction)が考えられました。さらに単語を単位とした点字の符号が作られて、現在使用される「英語点字略字」が完成しました。この略字には、1マス、2マス、3マス、4マス以上と四つの種類があるように見えますが、その形をよく見ると、略字として自立しているのは1マ

すと2マスものだけで、他は1マスの文字と2マスの略字、1マスと2マス、2マスと2マスの略字を合わせた構造になっていることが分かります。

点字の触読は、人差指の指腹で触れることで行われます。指は常に文字の並びに添って、行を左から右へ移動して行われます。その場合、一度に触れることのできるマス数は2マスです。その理由は、触読する人差指の幅が、点字2マスの幅よりやや狭いので、2マスを越えると、指自体を移動させなければならぬからです。フルスペリングの英語文を触読し難いのは、英語では一つの音節を表すのに、三つ、四つのアルファベットを使っていることが多いことによりです。

「それなら、両手の指で読めばよい」という主張があります。両手の人差指で読むのは大変大事なテクニクです。しかし、一度に多くの文字に触れることができるという理由でその必要性が求められるものではありません。指を左から右へ移動させて読む時、直ぐにぶつかる問題が行移りです。指が行の右端に到達した後、次の行の頭、下の行の左端に移動しなければなりません。如何に指をスムーズに行移動できるか、そのことが触読の正否を決めると言っても過言ではありません。その場合、触読する者の動きを決定する（意識）、「読む」という目的を持った（意識）が働いて

いることに注目しなければなりません。

意識は常に一つの方向を持っています。触読する時には、意識は指先に向かい集注されています。しかも両手に均等に注がれているのではなく、左右どちらかの指先に注がれています。右手が行末に近づくと、左手は次の行に移動して行頭の文字に触れて待ちます。右手が行末に到達すると同時に意識の移動が起こって、左手に注がれるのです。行頭から行末へ読み進まれる時も同様な移動が見られます。左手が行の中程へ達すると、右手がその後を引き受けます。意識も同様に左手から右手へ移動して、左手は次の行頭に移って次の意識の移動に備えるのです。この左右の指の運動と意識の移動が滞らずに行える人が、点字の触読の熟達者と言われるのです。

表5は、3マス以上の略字（縮語 SHORT-TERM WORD）の点字符号と綴りをまとめたものです。これらの略字は、単語の要素であるアルファベットを三つ、四つ取り出して、その文字列で単語を表すのです。この略字の重要な構造は、ここに用いられる文字列が、英語の単語には決して存在しないで、唯一この略字のみに用いられて、その単語のみが表されていることにあります。これらの略字を触読する際、読み手はそれが略字であることを時間差なく理解しなければなりません。

全ての単語が略字で表されることは不可能ですので、英語の点字の文は、このような略字とフルスペリングとが混在しています。略字であるか、そうではない文字の列であるかを瞬時に判断しなければならぬため、以上のような工夫がなされました。この略字は、触読に熟達した読み手であれば、たちどころに略字であることが了解されます。その理由は、限られた少数の文字列であつて、その配列がしつかり固定されていることによりです。これらの略字には、予め仮想の区切り線が用意されていて、熟練者は、指の動きがその線を越えた途端に、それが略字であることと、その単語とその意味を理解するのです。表中の「―」がその仮想の区切り線です。

これまで述べて来たように、点字の触読は、点字の符号に指が触れてからその点の数や位置を触知してその文字を判断しているのではなく、指がその点字符号に触れた途端に、その符号が何であるか理解しているのです。英語の略字もこの触読のメカニズムに添って校正されています。1マス・2マスの略字、その略字と文字の組み合わせ、また、またある単語の中から英語の綴りにはない文字列を取り出すことで語の構造を指示するのです。英語の表記法は文字(Letter)と語(Word)との関係が大変はつきりしています。点字

の略字もその関係に添って、極めて合理的に作られています。すなわち、それが音節を単位とした略字です。それらを組み合わせることで多くの単語を表現することができ、マスの数を減らして、指の動く範囲を小さくしているのです。そして数は少ないのですが、単語を単位とした略字(縮語)が、英語の文の要となる語を占めているのです。

このように、英語の点字は、読み難い点字を、如何に読み易いものにするかというところに、力が注がれてきました。(略字)は、見事に難問に答を提出しています。しかし、この略字が可能なのは、英語という言葉が、音と意味が直結していること、文字(Sound)と語(Word)との関係、語は、文字の定式的な並びでできているという構造に由来したもので、それゆえ有効に機能しているのです。

「日本語点字の父」、石川倉次先生は、日本語の点字を創造するに当たって、この英語その他のヨーロッパの言語の点字を参考にしました。しかし残念ながら、それらの言語と日本語は、全く構造を異にしていたのです。

\*\*\*\*\*

表5

英語点字における3マスあるいはそれ以上の略字の分析表

⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(a)⠠⠠(l) ⠠⠠(m)	almost
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(a)⠠⠠(l) ⠠⠠(r)	already
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(a)⠠⠠(l) ⠠⠠(th)	although
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(a)⠠⠠(l) ⠠⠠(t)	altogether
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(a)⠠⠠(l) ⠠⠠(w)	always
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(con) ⠠⠠(c)⠠⠠(v)	conceive
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(d) ⠠⠠(c)⠠⠠(v)	deceive
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(p)⠠⠠(er) ⠠⠠(c)⠠⠠(v)	perceive
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(r) ⠠⠠(c)⠠⠠(v)	receive
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(h)⠠⠠(er) ⠠⠠(f)	herself
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(h)⠠⠠(m) ⠠⠠(f)	himself (⠠⠠⠠ him)
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(m)⠠⠠(y) ⠠⠠(f)	myself
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(one) ⠠⠠(f)	oneself
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(the)⠠⠠(m) ⠠⠠(v)⠠⠠(s)	themselves
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(ou)⠠⠠(r) ⠠⠠(v)⠠⠠(s)	ourselves
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(y)⠠⠠(r) ⠠⠠(f)	yourself (⠠⠠⠠ your)
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(y)⠠⠠(r) ⠠⠠(v)⠠⠠(s)	yourselves (⠠⠠⠠ your)
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(a)⠠⠠(b) ⠠⠠(v)	above
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(a)⠠⠠(c) ⠠⠠(r)	across
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(a)⠠⠠(f) ⠠⠠(n)	afternoon (⠠⠠⠠ after)
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(a)⠠⠠(f) ⠠⠠(w)	afterward (⠠⠠⠠ after)
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(a)⠠⠠(g) ⠠⠠(st)	against (⠠⠠⠠ again)
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(b)⠠⠠(r) ⠠⠠(l)	braille
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(d) ⠠⠠(c)⠠⠠(l)	declare
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(g)⠠⠠(r) ⠠⠠(t)	great
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(i)⠠⠠(m) ⠠⠠(m)	immediate
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(p)⠠⠠(er) ⠠⠠(h)	perhaps
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(r) ⠠⠠(j)⠠⠠(c)	rejoice
⠠⠠⠠⠠⠠	⠠⠠(t) ⠠⠠(g)⠠⠠(r)	together

石川倉次先生の「日本語点字」

①「日本語点字」の構成

一八九〇（明治二三）年十一月一日、「日本語点字」が制定されました。石川倉次先生が考案されたものを、明治政府が公認したものです。石川先生は、ルイ・ブライユの点字を日本語の表記に応用できないかとお考えになり、五十音の仮名の点字を完成されました。先生は、ヨーロッパの点字で、ルイ・ブライユの点字表の二六番以降の点字符号が音節略字として用いられていることに注目し、また当時最も新しい日本語の表記法であるローマ字の表記を参考にされ、この「日本語点字」をお作りになったのです。

ローマ字の表記とは、日本語の発音を音節ととらえて、母音を基礎にして、それに子音を前置することで一つの音を表そうとするものです。日本語をヨーロッパの文字であるアルファベットで表す方法として考案されました。例えば「A、I、U、E、O」の五つの母音に、力行にはK、サ行にはS、夕行にはTを前置するということです。

石川先生は、ルイ・ブライユの点字表の一から一〇の内、左上の三点で構成される符号五つを「あ・い・う・え・お」の母音に当て、右下の三つの点の組み合わせで子音を表して、一つの音を1マスで表すことに

成功しました。  
表6が、その一覧表です

表6 石川倉次の日本語点字の構造

あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	(K)
⠁	⠃	⠄	⠅	⠆	⠊	⠋	⠉	⠊	⠊	
さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	(T)
⠎	⠇	⠊	⠊	⠊	⠊	⠊	⠊	⠊	⠊	
な	に	ぬ	ね	の	は	ひ	ふ	へ	ほ	(H)
⠎	⠎	⠎	⠎	⠎	⠊	⠊	⠊	⠊	⠊	
ま	み	む	め	も	ら	り	る	れ	ろ	(R)
⠎	⠎	⠎	⠎	⠎	⠊	⠊	⠊	⠊	⠊	

## 漢点字訳書のご紹介

### 『日本語練習帳』漢点字版が完成しました。

大野晋著、岩波書店発行、岩波新書に収められた同書の漢点字版が完成しました。本書は、昨年ベストセラーとなりました。親しみ易い語り口で、私たち日本人の日本語に一石を投じられました。

二分冊、三、〇〇〇円。以下、後書きから。

あとがき

『日本語練習帳』という本を考えて材料を集めはじめたのは一〇年ほど前のことだった。その後、岩波書店の私の本の編集や校正にかかわったことのある方々に、三週おきくらいに問題を課し、答えを見ては批評・質問を交わす会合をもった。それぞれ英語・ロシア語・イタリア語・日本古典語などの知識のある方々なので会話はいろいろ発展し、その言葉の会は楽しいものだった。二年ほど続いたそのやりとりを再現する原稿も作ってみたが、全体の均衡上、結局収められな

った。その時のメンバーは鈴木稔・土方邦子・加賀谷祥子・天野泰明・山田まり・清水愛理という五〇代から二〇代のみなさんである。

原稿としての仕上げには大野陽子さんの全面的支援をうけた。金子陽子さんも役立つ助言を惜しまれなかった。この本の編集に骨折ってくれた天野泰明君、その他、解答を試みて下さった方々などに、今、校正刷を手にしてあらためて心からの感謝を表明したい。

一九九八年一二月 大野 晋

### 「鍼の研究・漢点字版」が発行されています。

「鍼科学研究会」の研究誌としてかな点字版、活字版、テープ版が発行されていましたが、この4月号から漢点字版が加わりました。平方鍼法としてよく知られている同協会の研究誌です。他の版と同じ内容の雑誌が漢点字版として世に出されるのは、同誌が初めてです。

ご購入の希望は、信愛福祉協会点字出版部福岡分室、  
電話 092・542・4125

E-mail a-fujikawa@mx2.tiki.ne.jp

今年第二回目の講習会が  
終了しました。

昨年から準備を重ねて参りました、  
コンピュータによる漢点字訳の講習会  
が、無事終了しました。

受講のご希望が多数にのぼり、二回  
に分けて実施することになった講習会  
も、三月に行いました一回目に引き続  
き、二回目が六月二五日(日)から四  
週にわたって行われました。今回は十  
四名の皆さまが修了されました。受講  
されました皆さまには、長らくお待た  
せ致しましたことに、深くお詫び申し上

「鍼の研究・漢点字版」 価格

漢点字版	700円
仮名点字版	600円
活字版(B5版)	700円
拡大版(A4版)	800円
テープ版	1000円

なお、点字の記号類、レイアウト等、本会の発行物  
と異なる場合がございます。ご了承下さい。

げますとともに例年になく猛暑の中、熱心に取り組ん  
で下さいましたことに、心より御礼申し上げます。今  
後は、本会の活動にご参加いただくこととなります。  
どうぞよろしくお願い申し上げます。





また、講師をおつとめいただきました、あるいはお手伝い下さいました会員の皆さまにも、心より御礼申し上げます。

本誌に、一回目の受講者の岸田晴美さまと、今回の受講者の馬場威力さまより原稿を頂戴致しております。ご精読下さい。

修了者の皆さまのお名前は以下のとおりです。

(五十音順、敬称略)

青木 淳子	青木 紀子	赤松 朋美
石田 光春	井上 昌子	薄刃 茂昭
岡村 公子	滝口 洋子	中道 章子
長沼 祐子	馬場 威力	広部 紀美子
安武 恵	若木 直彦	以上

## 五ヶ月間を振り返って

新会員

岸田 きしだ 晴美 はるみ

三月の講習会を受け始めた頃の感想を一言で言うとして、私個人の《パソコン知識に問題あり》でした。そして、回を重ねるに従って不安が募り、途中から、「分からないことは何でも聞いて、ひとつずつ解決して行くしかない。」…それから、何かと先輩方にお世話になりました。ところが、ひとつ安心したのは、私が疑問に思ったことは先輩方も「あれ?」と疑問を持たれたことでした。私の疑問を解決するために、先輩方はお忙しい時間を割いてくださり感謝の気持ちでいっぱいです。ちよつとした事でも真剣に考えてくださる先輩方の姿勢、心から尊敬いたします。

漢点字と仮名点字の区別も分からず講習会に応募してしまい、一度は岡田さんにお断りしたものの私の無知を大目に見て下さって今に至るのですが、この五ヶ月間を振り返ると「辞めないで良かった。」という思いです。

羽化の会の活動内容が知りたくて、今のところなるべく色々なことのお手伝いをさせて頂いています。テキストファイルの作成・校正・製本・郵送等々。印刷

以外は会員の手作業ということが分かりました。

遅ればせながら漢点字と仮名点字の違いが分かり、ある出来事を思い出しました。私は昨年、アメリカにいた友人（日本人）に初めてE・メールを送った時に、友人のパソコンに日本語ワープロ機能がなかったため画面に文字として出なかったそうです。今はファックスで文通をしています。お互いにファックスができると気付くまで、ローマ字でE・メールを送り合いました。その時、岡田さんがおっしゃるように、日本語に漢字がないとどんなに読み辛いか経験しました。「しよくじのしたくはしたくない（食事の支度はしたくない）」とか「くるまがくるまでまった（車が来るまで待った）」などのローマ字文をスラスラと理解しながら読めず、お互いに二、三回の送信で音を上げてしまいました。《日本語はやっぱ漢字が必要》そこで《漢点字をもっと広めたい!》漢点字はまだまだ発展途上にあるということも分かりました。十年後、二十年后に私たちの活動の成果が出ていることを切に願います。私がライフワークとしてやっていこうと思いついた今、会員の皆さんと共に精一杯頑張りたいと思います。

## 初心者の感想

栄区

馬場はば 威力たけお

漢点字の世界の右も左も分からないまま、羽化の会に加えていただきました。木下さん、雨宮さんに無理をお願いして創刊号からの会報『うか』バックナンバーを頂戴して、懸命に勉強している最中です。また、先の月例会で急遽、『漢点字入門』を入手して、付け焼き刃的のでも理解出来れば、と考え熟読中です。高齢者には決して易しくはありませんが、努力中です。

私自身、この二年間にあちこちのボランティア活動に参加して微力ではありますが、社会貢献の一端を垣間見始めたところです。そこで痛感しましたのは、このグループの岡田さんを初めとして会員の方々の並々ならぬ貢献活動の実態です。

可能性のあるものは、それに対処できるように準備しておく、との岡田さんの言葉に感激しました。それは、普通この社会では、日本の社会では、不可能性が少しでもあれば、先送り、先送りされてしまいます。そして、その時に慌てふためくことになります。危機管理体制の欠如が叫ばれる所以です。

私、この春先、米国の北東部を旅してきました。ミ

シシッピー川の東側の北部と南部とを較べて見たくなつた、それだけのことだったのですが、そのために都会を避けて、田舎をゆつくり、のんびりとドライブしてきました。その一万キロほどの弥次喜多道の間、四肢障害者にはずいぶんとお会いしましたが、視覚障害者、聴覚障害者にはお目にかかれませんでした。前者の場合には、さすがは車社会の国、自動車自身、道路それ自体、また駐車場も全て完備しているのです。ところが後者の場合、空港、ホテルなどで僅かに点字にお目にかかれた程度でした。ましてや、白杖などは：気がつきませんでした。これはどの様に考えればよいのでしょうか。よく分かりませんが、超車社会、それだけに障害者は車無しでは身動きできません。したがって、どうしても健全者の百パーセントの支えが必要になるからではないでしょうか。

だからと言って、点字を疎かにしているわけではないようです。それは、例えば、バージニア州では州立の点字センター（点字プリント工場）があり、各地の学校、図書館へ点字書籍を供給して積極的な幅広い教育を施していました。

とにかく、習うより、慣れる、と思えますので、先輩の皆様方のご指導をお願いいたします。

## 点字から識字までの距離（一八）

山内 薫（墨田区立緑図書館）

今回は識字・非識字を巡る二冊の本を紹介する。

最初は、このところベストセラーとなっている『朗読者』（ベルンハルト・シュリンク著、松永美穂訳、新潮社）という本だ。この物語の前半は一五歳の少年と三六歳の女性の恋物語で、女性の失踪によって幕を閉じる。そして、後半は一転して重苦しい展開になる。七年を経た後の二人の再会の場合は裁判所だった。少年は法学を学ぶ学生、女性は法廷の被告人として相見えることになる。彼女は戦時中、強制収容所の看守をしており、戦後二十年近く経過した後の、ドイツ人がドイツ人の戦争犯罪を裁いた裁判で、無期懲役を言い渡される。何故彼女は失踪したのか、何故書いてもいらない報告書を書いた、と偽った証言をして罪を着たのか。朗読者という書名の謂われは、主人公が女性にせがまれて、逢瀬の前に三十分間、様々な本を読んで聞かせることが何時しか習慣となったこと、そして、刑が確定して何年も経ってから、主人公が服役中のこの女性に以後十年間、自分で朗読したテープを送り続けるというところからきている。

この物語の底に流れる一つのテーマは非識字の問題である。（この翻訳書の中では文盲という言葉が使われているが……）前半や裁判所での彼女の不可解な行動の原因が「文字を読めない」ためであったということが中程で明らかにされる。彼女は刑務所でテープを頼りに必死になって文字を覚え、読むことと書くことを覚えていった。やがて、恩赦の決定があり、主人公は刑務所に行つて会う決心をし、再会するが……。

この小説の後半で、非識字に関して次のようなパラグラフがでてくる。「文盲の人々が日常生活を送る際の寄る辺なさや、道や住所を見つける際の困難、レストランで料理を選ぶときの大変さ。与えられた模範や確立されたルーティーンに従う際の不安や、読み書きができないことを隠すために、本来の生活とは関係のないところで費やされるエネルギー。」「文盲であるということは、市民として成熟に達することができない、ということだった。」

また、彼女が文字を覚えてからは、テープで送られてきた様々な作品について二、三行の感想が届くようになるが、「彼女は作家について何も知らなかったの、そんなことはあり得ないとはつきり分かる場合を除いて、どの作家もみんな現代人だという前提で感想を書いてきていた。」という記述があり、興味を引か

れる。文字を読むことができないということは、ある意味ですべてを現在形で思考することなのだろうか。

丁度、半年ほど前に読んだ本（『本が死ぬところ暴力が生まれるー電子メディア時代における人間性の崩壊』バリー・サンダース著、杉本卓訳、新曜社、一九九八）に、次のような箇所があった。「口承世界では、話すことと考えることは同時に発話された文のなかで起こる。」

この本は、現代の若者の識字の危機について警告を発した本だが、様々な示唆を与えてくれる。「識字世界に入る人、あるいは集団はすべて、まず口承文化の世界で読み書きの基礎を築く。口承文化は識字文化を支え、識字文化を形成する刺激となる。口承文化で学ぶ技能が決定的に重要である。というのは、識字文化というのは単に紙に書かれた単語の連なり以上のものだからである。識字文化は、関係と構造の集積であり、人が内化し経験へと『進む』ことができるかどうかを決める。」にもかかわらず、この識字への道を「テレビ・映画にはじまって、レコードやCD、パソコンやテレビゲームまで、考えうるあらゆる種類の電子機器が妨害している」と作者は言う。そして、「識字化された心は、識字によって分析された現実を内化することによって、内化されたテキストという新たな空間

（記憶、意識、自己といった要素によって構成される）を生成する。」しかし、この「内化されたテキスト」という自己概念が、電子時代に画面というメタファーに置き換えられることによって、人間はこれまでと全く異なったものになる。口承文化の遊び心もしなやかさももたず、識字文化の内省的・批判的に思考する自己も持たない、新たな人間たちは、良心や罪悪感といったものをもたない。」（あとがき）内化されたテキストを持たないということは、内省的な自己を持たないということであり、自問や反省、罪悪感というものをおく。最近話題の「一七歳」や若者の相次ぐ不可解な事件をみるにつけて、この本は説得力を持っているように思える。

「崩壊しつつある『自己』をとりもどすためには、識字の根元にさかのぼって、口承世界における経験を大切にしなければならぬ。声を回復することによってはじめて、本来の識字が可能になり、そこから解決の糸口が生まれるだろうというのが、サンダースの考えの中核であろう。」と訳者は結んでいる。

二冊とも「識字」という問題について、考えさせられる本である。

# 漢点字ってどんな字？ 20

にんべん①	にんべん②	いとへん①	いとへん②
*人	仁	*糸	系
付	伸	総	紅
仕	佳	絡	結
さんずい①	さんずい②	ごんべん①	ごんべん②
*水	氷	*言	語
河	汗	討	詩
法	江	話	請



一つの偏に、二つの点字

未来 みき

いとへん、ごんべん、  
にんべん、さんずい。

漢点字ではこの部首に二  
つの点字符号があるのね

志朗 しろう

いとへんやごんべんの  
字はたくさんあって、  
一つじゃ足りないんだ

紅は  
どっちの  
糸かしら？



氷の  
は



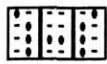
さんずいだけでなく  
全てのン(にすい)  
にも使われるよ



次





氷



↑ 水の  
異体

# 1マス漢点字（第一基本文字）

	あ ㊦段	い ㊧段	う ㊨段	え ㊩段	お ㊪段
あ ㊦行		*糸 ㊦ 糸 ㊦ 比 ㊦ 数 ㊦	家 ㊨ 宿 ㊨ 学 ㊨	*言 ㊩ 語 ㊩ 	*頁 ㊪ 貝 ㊪ 
か ㊫行	*金 ㊫	*木 ㊫	草 ㊫	*犬 ㊫	*子 ㊫
さ ㊬行	都 ㊬	*市 ㊬	発 ㊬	*食 ㊬	*馬 ㊬
た ㊭行	*田 ㊭	*竹 ㊭	*土 ㊭	*手 ㊭	*戸 ㊭
な ㊮行	*人 ㊮ 仁 ㊮	*水 ㊮ 氷 ㊮	*力 ㊮	*示 ㊮	私 ㊮
は ㊯行	走 ㊯	進 ㊯ 火 ㊯	*女 ㊯	*玉 ㊯	*方 ㊯
ま ㊰行	*石 ㊰	*耳 ㊰	*車 ㊰	*目 ㊰	*門 ㊰
や ㊱行	病 ㊱		行 ㊱		店 ㊱
ら ㊲行	*月 ㊲ *肉 ㊲	分 ㊲ 日 ㊲	性 ㊲ 心 ㊲	*口 ㊲ 囿 ㊲	*十 ㊲ *止 ㊲

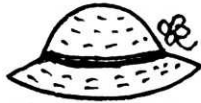
\* は、一文字全体が部首になる字。■ は、復習。□ は以下で説明する字。

かんむりと、かしら

おねえ 一マス漢点字の半分以上はそのま  
さん 部首になる字だったわね。(＊印)

その他は、その含まれている字を代表  
する点字符号として使われるのよ。  
系が糸偏、語が言偏にも  
なったようにね。

例えば次の六つの字だけけれど…。

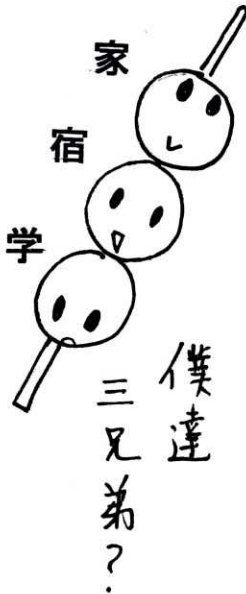


草 ⋮ ⋮ ⋮	家 ⋮ ⋮ ⋮
発 ⋮ ⋮ ⋮	宿 ⋮ ⋮ ⋮
分 ⋮ ⋮ ⋮	学 ⋮ ⋮ ⋮

未 全部頭に何かが付いている字よ。

志 かんむりやかしらの部分を取り出して  
部首と考えたんだね。

学 ⋮ ⋮ ⋮	宿 ⋮ ⋮ ⋮	家 ⋮ ⋮ ⋮
ウ下 <sub>り</sub> の <sub>下</sub>	ウ下 <sub>り</sub>	ウ
榮 ⋮ ⋮ ⋮	宋 ⋮ ⋮ ⋮	宇 ⋮ ⋮ ⋮
受 ⋮ ⋮ ⋮	害 ⋮ ⋮ ⋮	宝 ⋮ ⋮ ⋮
つめかんむり(爪冠) のづめ(ノ爪)	うかんむり(ウ冠)	うかんむり(ウ冠)



未 あれ、うかんむりが二つある！  
そうか、ごんべんやにごんべんと  
同じ考えだね。



へん・によう・たれ・かまえ

<b>性</b> 性 二 二 二 ル	<b>私</b> 私 二 二 二 ノ	<b>都</b> 都 二 二 二 サ
情 二 二 二 慎 二 二 二 りっしんべん(立心偏)	秋 二 二 二 和 二 二 二 のぎへん(ノ木偏)	部 二 二 二 阿 二 二 二 おおざと(邑) こそと(阜)

「都」は、右側にかけて

おおざと

左側にかけて  
 こそとへん

のぎへん代表は



です。



<b>行</b> 行 二 二 二 ュ	<b>進</b> 進 二 二 二 ヒ	<b>走</b> 走 二 二 二 ハ
径 二 二 二 街 二 二 二 ぎようにんべん(行人偏) ぎようがまえ(行構)	週 二 二 二 辻 二 二 二 しんによう(之繞)	起 二 二 二 越 二 二 二 そうによう(走繞)

未 「心」が偏になると  
 細長く伸びて **心** りっしんべん  
 漢点字では  
 りっしんべんは  
 性 **性** (ル)だ。  
 未 志  
 「心」と書く時は  
 心 **心** (ル下がり)  
 だったわね。



<b>店</b>  ヨ	<b>病</b>  ヤ	<b>困</b>  レ下リ
 	まだれ (麻垂)  癒 	くにがまえ (国構)  固 

未 漢点字では、困がくにがまえで、店がまだれになるのね。

志 使われ方が理解できると分かりやすいよ。

お 川上先生が漢点字を考案されるのに『基本文字』を作られたわけが分かるわね。

基本文字は、一文字だけど部首にもなる。これがミンじゃ。



未 志

(一文字でもある) 部首と部首を組み合わせてると他の字ができるっていう、漢字の成り立ちをそのまま点字にしたのね。

だから漢点字を勉強する人は、普通の文字と比較するのが理解の近道なんだ。

《漢字の姿を反映する漢点字》

二ころ心  
  
+  
 まだれ店

で

未 最後に二つ残っちゃった。

志 比と数!

お これは次のお楽しみね。基本文字がうんと広がるわよ。



(作 岡田・絵 吉田)

白桃を洗ふ誕生の子のごとく

大野林火

一ところ暗きをくぐる踊の輪

橋本多佳子

朝顔の紺のかなたの月日かな

石田波郷

「歳時記」より

### 編集後記

久方ぶりに本誌の編集に復帰いたしました。読者の皆様、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。また休んでいた間、本誌編集にご尽力下さいました平野様に厚く御礼申し上げます。

さて、本号も多くの方にご執筆頂きました。ありがとうございました。インターネットによるパソコンの普及、一般市民には追いつけぬ程のパソコン性能の向上。音声とピンディスプレイで操作をしておられる視覚障害者の皆様のご苦労は有り余るものと思います。特にWINDOWSに対応する音声ソフト等に苦労されているように聞いております。WINDOWSに対してお意見・インターネット等に関する体験談等をお聞かせ下さい。原稿は、千字〜二千字程度、テキストデータのフロッピーディスク或いは、手書き原稿（漢点字も可）をお送り下さい。テープ版・ディスク版をご購読の方は、返送時に同封して下さい。

次回の発行は十月十五日です。

宗助 悦子

\*本誌（活字版・テープ版・ディスク版）の無断転載はかたくお断り致します。

表紙絵 岡 稲子

前号からの続きですが、ここでは MS-DOS 版の EIBRK の操作について説明しています。

## 1. 変換画面のキー操作(つづき)

### (9) ページ行編集

ページ番号が打たれる、点字文書の最上段をページ行と呼びますが、ここに文字(点字)を記入したい場合があります。ここに挿入される文字の入力・編集をするには、f.6 キーを押してページ行編集モードに入ります。

ページ行の編集にはいると、最初カーソルは行頭から3マス目にあり、矢印キーによってもそれより左には移動できません。これは、最低限でも行頭に2マスのスペースを置くことにしているからです。ここに標題などとは別に原文ページなどを行頭に打ちたい場合があります。その場合は、f.1 キーを押して下さい。原文ページ入力のモードになりますので、ここに数字を入れます。ここで許されるのは数字のみで、0を入れると何も表示されなくなります。リターンキーで原文ページの入力を終了すると、点字に変換されて行頭に表示されます。

標題などの文字列の開始位置は矢印キーでカーソルを移動して決めます。ここで CTRL+XFER を押して日本語入力のモードにして、必要な文字列を入力しますが、本文中の文字をここに貼り付けたい場合は、f.2(クリップ)キーを押します。ここで始点を決めるよう促されますので、矢印や ROLL UP、ROLL DOWN または f.7(次ページ)、f.8(前ページ)キーでカーソルを始点まで移動してリターンキーを押し、次いで

終点を決めます。前もって本文中の文字をコピーする要領でクリップボードに記憶させておいたものも同じように使えます。このようにして得られた文字列は、f.3(ペースト)キーによってページ行の標題として貼り付けることが出来ます。この場合、文字を挿入する位置は行頭に限られますので、一旦挿入したらリターンキーを押して、点字変換を行います。確認の位置にカーソルがある時に上向き矢印または BS キーを押すと、カーソルが標題文字列のところへ移動しますので、適当な位置でスペースを挿入したり削除したりして、表示位置を調節することができます。この場合のスペースは半角でも全角でもかまいません。

更にこのモードでは f.6(同文)キーが使えます。これは、直前に表示したページ行と(前ページでも次ページでも)同じ文字列を挿入するもので、この場合既に表示されていた文字は無視されて、直前表示ページと同じものとなります。これは、ページ行の表示は同じものが連続する場合が多いということを考慮して作った機能です。

ページ行の全データを削除したい場合は、f.4 キーを押します。ページ行編集モードの終了は、ESC か f.10 キーです。

### (10)バックアップ

変換後に画面で編集をする場合、特に変換の際のファイルがフロッピードライブにある場合は、時として作業中にエラーが起こってファイルがおかしくなることがあります。このようなとき、編集を始める前に f.6 キーを押して「バックアップ」をしておく、テキストファイルと変換ファイルすべてが、あらかじめ指定してあるバックアップ用のディレクトリに自動的にコピーされます。このバックアップ用のディレクトリ(パス)は、オプションで指定します。例えば、B:¥BAK をバックアップパスとして指定しておく(このパスは、あらかじめ作っておかなければなりません。例えば、Bドライブで MS-DOS のプロンプトから「MD ¥BAK リター-」とすれば B:¥BAK というパスが出来ます。) 変換した結果はテキストファイルを含めてすべて B:¥BAK にコピーされます

また、バックアップの別の使い方として、変換・編集作業はハードディスクで行い、できあがった1セットのファイルをフロッピーにコピーして、別の人に送るなどの時、フロッピードライブをバックアップ用のディレクトリとする、というような使い方も便利でしょう。

### (1 1) オプション設定

f.9 キーを押すと、パス・印刷条件を設定するオプション設定の画面になります。これは、「2. ファイル選択画面のファンクションキー」で説明した f.9 と全く同じものです。

## 4. メニュー画面

変換画面で ESC キーを押すと、メニュー選択のモードになります。メニューは、画面の下2段に番号で表示されています。それらのついて、順番に説明しましょう。

### (1) ファイル読み込み

最初に説明したファイル選択の画面になり、ファイル一覧表からファイルを選ぶことになります。

### (2) 再変換

点字変換画面で挿入、削除などの変更を加える(編集する)ことについては、既に説明しましたが、これらの結果はテキストセーブ(f.4)をしないと、もとのテキストファイルに編集結果が反映されません。ここで再変換を選ぶと、その時点のテキストファイルをもとにして変換をやり直します。したがって、編集結果を全部やめて最初の状態に戻りたい場合は、そのまま再変換をすればよいし、編集結果を反映させた結果を見たい場合は、テキストセーブをしてから再変換します。ただし、テキストセーブをした後は、自動的に再変換されますので、その場合は改めて再

変換する必要はありません。

また、うっかり不必要な再変換をしないように、再変換を選んだときは確認のメッセージを出すようにしています。ここでY(またはy)を入れないと再変換は行われません。

### (3)印刷

ここで選べる「印刷」は、点字印刷機による点字の印刷です。通常のテキストファイルや、点字変換した画面の直接印刷はできません。変換画面の印刷は間接的になりますが、後で説明する「一太郎」ファイルへの変換で作ったファイルを、一太郎やその他のワープロソフトで印刷して下さい。

点字印刷機は、メーカーによってその仕様がそれぞれ異なっているので、どの印刷機でも使えるというわけではありません。現在のところ使える印刷機の機種は、オプション設定の項で説明した6種に限られますが、それらの機種でも8点漢点字が使えるように、言語使用が適切に設定されていなければなりません。個々の場合については直接お問い合わせ下さい。

このメニューで「印刷」を選ぶと、サブメニューが出て更に項目を確認し、必要なら設定し直すことができます。開始ページNoや開始副ページNo、巻No、プリンター機種などは、オプションで指定した内容が表示されますが、ここで再設定することもできます。プリンターの機種を設定するにはf.10キーを押します。

印刷部数については、プリンターの機種によってメモリーの大きさが異なり、1度に指定できる印刷部数が制限されることが多いので、注意が必要です。特に、エベレストやベーシックDは、比較的大きいメモリーを持っていますが、全部のデータを読み込まないと印刷が開始されないの、複数部数の印刷をする場合は、ここでの指定は1部とし、1冊分印刷を終了してから、プリンターで追加部数を指定するようにします

(以下次号)